日本語の認知特性と移動表現

清　水　伸　子

要　　旨

今までの移動表現の研究では，主に動詞の語彙的意味分類とその記述が行われてきた。しかしながら，実際の発話における動詞の選択および使用は，動詞の語彙的意味分類だけでは説明しきれないところがある。本稿では，実際の発話における動詞の選択および使用は，問題の状況を把握する際にその言語ではどのようなことに話者の関心が向けられるのかという認知レベルの要因が関係していることを指摘し，移動表現の研究には各言語がそれぞれ持っている認知レベルでの特性を考慮しなければならないということを主張する。その上で，日本語の移動表現に関する認知レベルでの特性を考察する。また，日本語とは全く異なる認知特性を持つ言語の例にも触れ，各々の言語がどのような認知特性を持つ言語であるのかということが，移動表現の通言語的研究にとって必要であることを述べる。

キーワード
接近・離反・中立・視点・認知特性・様態・空間的方向・時間的方向・事態の推移の方向

1．日本語の移動動詞に関する先行研究

1－1．「方向」の移動動詞と「様態」の移動動詞

「移動」という現象には，普遍的に関係するいくつかの概念が存在するのであるが，「移動」という現象を扱う際に「方向」と「様態(注1)」を区別しなければならないということを指摘したのが池上1981と宮島1984である。池上1981（pp.263～269）では，結果の達成を含むか否かという観点から，「移動」を表す動詞を〈場所の変化〉をあらわす動詞と単なる〈行為〉を表す動詞とに分類している。宮島（1984）では，移動を表す動詞を，①純粋に移動（位置変化）を表す動詞（ex.「移る」），②方向を表す動詞，③様態を表す動詞，の三つに分類し，日本語とヨーロッパ言語の移動動詞を比較し，その結果，日本語は語彙的に「方向」の区別に富んだ言語であると述べている。そして，これに対して，ロシア語の移動動詞は「歩いて行く」「乗り物で行く」といった「様態」の区別に富み，「方向」の要素はこの「様態」を表す動詞に接頭辞や前置詞で付け加えられることから，ロシア語は「様態」を重視する言語であると述べている。

1－2．「様態」の移動動詞の特性

日本語では例えば「歩く」「走る」といった動詞が，「様態」の意味特徴を含む動詞として挙げられる。従来から，これらの動詞は「方向」という意味特徴を含む動詞とは異なり，方向句とは共起しないことが知られている。（池上1981，田中・松本1997，pp.184～189，景山1996，p. 7）

（1）　竹内さんは駅に行った／来た。
（2a）＊竹内さんは駅に歩いた。
（2b）＊竹内さんは駅へ歩いた。
（3）　竹内さんは駅まで歩いた。

（2）で見られるように，「様態」の移動動詞をニ格やへ格と共に用いると文は非文となる。しかしながら，このニ格やへ格をマデ格に変えると文は適文となる。これは，マデ格がニ格やへ格とは違って移動範囲を明示するものであるため，移動過程を問題とする「様態」の移動動詞と共起することが可能となるのだと説明されている。そしてこのことから逆に，例文（2）が非文となる理由は，へ格やニ格のような方向や着点という概念が「様態」の移動動詞とは意味的に合致しないためであると説明される。つまり，「方向」の移動動詞と「様態」の移動動詞の振る舞いは，方向や着点という概念と共起するか否かという点で異

なっているということであり，このことがこの両者の動詞を統語的に分けて扱わなくてはならないということの根拠にもなっている。

1－3．「方向」の移動動詞「行く」「来る」の特性

「方向」を表す動詞の中でも特に「行く」と「来る」の分析を行っているのが大江1975と久野1978である。大江1975では，「行く」「来る」の使い分けには，A 地点から B 地点への移動行為を描写する際に話者がどこから移動行為を眺めているか，つまり，視点がどこにおかれているかが関係するとし，「行く」は出発点に話者の視点がある場合であり，「来る」は到着点に話者の視点がある場合であると述べている。そして，通常，話者のホームベースに属する地点が視点のおかれる場所であり，話者のホームベースに属すると認識されるのは，話者のいる場所，話者の家および職場，話者に近い人（家族･話者と一緒にいる人）などであるとしている。（大江1975，pp.39～47，pp.91～93） しかしながら，大江1975は，移動行為の描写に際しては必ずしも話者のホームベースに視点がおかれるわけではないことも指摘し，これに当てはまる場合として命令文や疑問文を挙げている。（大江1975，pp.85～91）

（4）きのうきみのところに山田さんが来ましたか／＊行きましたか。
（5）あしたまたそこに来てください。 （大江1975）

聞き手のホームベースに向かう移動に関する疑問文や命令文では，聞き手のホームベースに視点がおかれ，話者のホームベースに向かう移動ではない場合でも「来る」が用いられる，と述べている。（5）は，あるレストランにいる聞き手に話者が自宅から電話をしている際の発話であり，しかも話者は聞き手の到着時である「あした」に到着点のレストランにはいないという状況でも非文ではない。（4）（5）の両例文とも，聞き手のホームベースに視点がおかれているのであるが，大江1975はこの現象を話者が聞き手の視点に乗り移ったものであるとし[注2]，いずれにしても日本語の「行く」「来る」は話者の視点から見た接近の移動であるのか（到着点に視点があるのか），離反の移動であるのか（出発点に視点があるのか）の違いであるとしている。

話者のホームベースという概念から「行く」「来る」の違いを分析した大江1975に対して，久野1978は，視点のおかれる場所，言い換えれば，話者のホームベースに関する考察を行っている。久野1978では，話者が視点をどこにおくのかは「文中の名詞句の X 指示対象に対する話し手の自己同一視」つまり「共感度」によって決定されるとし，当然，話者はどんな対象にも等しく共感できるわけではないため，共感度に関して階層性があること

を指摘している。(久野1978, pp.129～140) そして，この共感度の階層性の観点から，①話者の視点は聞き手の視点に優先する；E（話者）＞E（聞き手），②話者の身近な人の視点は聞き手の視点に優先する；E（話者の身近な人）＞E（聞き手），③聞き手の視点は不特定３人称の視点に優先する；E（聞き手）＞E（不特定３人称），ということを述べている。(久野1978, pp.253～266)

（６ａ）今からすぐ僕の家に行ってください。
（６ｂ）今からすぐ僕の家に来てください。　(久野1978)

大江1975では，命令文において聞き手の視点に話者が乗り移ることが述べられていた。しかしながら，話者のホームベースが到着点である命令文の場合では，（６）に見られるようにその移動が話者のいる場所へ向かう移動なのか（６ｂ），そうでないのか（６ａ）によって「行く」「来る」が使い分けられているとし，話者の視点が聞き手の視点に優先することを指摘している。②③の指摘についても以下の例文を参照することで確かめられる。

（７ａ）　うちの娘がお宅に行っていますか。
（７ｂ）＊うちの娘がお宅に来ていますか。
（８ａ）＊誰が訪ねて行っても，家には入れないでください。
（８ｂ）　誰が訪ねて来ても，家には入れないでください。　(久野1978)

また，久野1978では，３人称間の移動に関しても触れ，大江1975が指摘した違い以外に，「行く」には出発点にも到着点にも視点をおかない，いわば中立の視点から移動を描写するという意味機能があることを指摘している。

（９ａ）＊太郎が花子のところへ会いに来た日は，丁度花子が太郎ところへ会いに来た日であった。
（９ｂ）　太郎が花子のところへ会いに行った日は，丁度花子が太郎のところへ会いに行った日であった。

（９ａ）では，前半部は「来る」によって「花子」に視点がおかれ，後半部もやはり「来る」によって「太郎」に視点がおかれるという，視点に関して一貫性がない文となっており，それゆえこの文は非文となっている。しかしながら，（９ｂ）において前半部も後半部も「行く」が用いられているが非文ではないということから，「行く」は出発点に視点をお

いて移動を描写する以外に，出発点にも到着点にも視点をおかず中立の視点から移動を描写するという意味機能があることがわかる。

以上の日本語の移動動詞の先行研究をまとめると以下のようになる。

（ｉ）日本語の移動動詞は語彙的にもその振る舞いの点から見ても，「方向」の移動動詞と「様態」の移動動詞に分けられ，日本語は「方向」を区別する動詞に富む。
（ii）「方向」の移動動詞と「様態」の移動動詞は，方向句または着点句と共起するか否かという点で異なる。
（iii）「方向」を表す動詞の中でも，「来る」は，到着点側に話者の視点がおかれ，問題の移動を話者の視点がおかれた地点に向かう移動（接近）として提示する動詞である。
（iv）「方向」を表す動詞である「行く」は，出発点側に話者の視点がおかれ，問題の移動を話者の視点がおかれた地点から出発する移動（離反）として提示するか，または，到着点・出発点以外の地点から移動を中立的に眺め，接近・離反という見方を差し挟まず，単にA地点からB地点への移動として問題の移動を提示する動詞である。
（ｖ）話者が視点をおく場所は，共感度の観点からＥ（話者）＞Ｅ（話者に近い人）＞Ｅ（聞き手）＞Ｅ（不特定３人称）という優位性の階層性をもつ。

２．移動行為または出来事の認知レベルでの問題

前節で見てきたように，「方向」か「様態」かという観点にしろ，視点という観点にしろ，従来の日本語の移動動詞の研究では動詞を意味的に分類および記述することだけが行われてきた。

しかしながら，日本語の移動動詞の実際の使用を説明するにはそのような動詞の意味的分類だけでは不充分であると考えられる。ここでは，移動動詞の実際の使用には，動詞の語彙的意味以外に，移動行為または出来事を言語化する際の認知レベルでの特性が大きく関係することを指摘し，その特性について考察していくことにする。

２－１．実際の発話における動詞選択を左右する要因

日本語の移動動詞の実際の使用を説明するには動詞の意味的分類だけでは不充分であると述べたが，それは次の例文によって確かめられる。

（10ａ）竹内さんは駅に歩いて行った。
（10ｂ）竹内さんは駅へ歩いて行った。

２－２節の（２）で，移動過程を問題とする「様態」の動詞は方向および着点の概念とは合致しないという先行研究の見解を挙げたが，（10）のように「様態」の動詞に「行った」を付けると文は適文となる。確かに，（10）では「行った」の部分が「方向」を表す移動動詞であるから方向句や着点句と共起可能となっているのだと考えれば，「様態」の動詞は方向の概念とは合致しないという従来の見解とは矛盾しない。では，次の（11）（12）のような文はどう考えるべきか。

（11）　　竹内さんは駅まで歩いて行ったよ。
（12ａ）＊／？あなた（彼は），家からここまで歩いたの！
（12ｂ）　　あなた（彼は），家からここまで歩いて来たの！

（３）と（11）から，「方向」という概念と移動過程はお互いに相矛盾するものではなく共起可能であることがわかる。しかしながら，移動範囲の終着点が発話時に話者がいる場所である場合には，（12ａ）のようにマデ格であっても文は「来る」を付けなければ不自然となる。（（12ａ）は，例えば地図上である地点を指差しながら発話される場合には適文となる。しかしながら，今は「ここ」で示される地点が発話場所と一致する場合のみを考える。）（12ｂ）からもわかるように，移動範囲を問題とする場合であるから「様態」の動詞を用いた発話をすればよいというわけではない。つまり，日本語は，移動行為を言語化する際に，移動過程を問題にするのか方向を問題にするのかということ以外の判断が第一義的に要求される言語なのであり，『「方向」・「様態」や視点という概念から日本語にはかくかくしかじかの意味の動詞が存在しています』という記述だけでは，実際に移動行為を言語化する際の動詞の選択を説明し切れないないのである。

以上のことより，日本語には，言語化に先立つ状況判断の際に「どのように状況を把握するのか」「何にそくして状況を把握するのか」という認知レベルにおいてある特性が存在し，日本語の移動動詞の実際の使用を説明するためには，この認知上の特性から考えていかなくてはならないということがわかる。次節ではこの特性に関して考察していく。

２－２．物理的移動行為に関する日本語の認知レベルでの特性

この節では，第一節の日本語の移動動詞に関する先行研究を踏まえた上で，日本語の移動表現について考え，日本語で移動を言語化する際の状況把握，つまり認知レベルでの特

性について考察する。

人間は出来事や現象または何らかの行為・状態・性質を言語で描写しようとする時には，当然，言語化に先立って，その問題の出来事や現象・行為・状態・性質がどういうものであるかを把握する必要があり，その状況把握の仕方が言語表現に反映される。

田中・松本1997では，図１の状況を言語で描写するには，「壷の下に机がある」は不適切であることを挙げ，状況把握をする際に「何が話題として取り上げられているのか」「２つの事物が与えられた場合，その両者の関係の中で決まる相互の役割」「表現者の当面の関心に即して，どの関係が状況的に適切であるか」という３つの概念が認知レベルで状況の把握の仕方を決定すると述べている。（田中・松本1997, pp.100～101）

（図１）



（田中・松本1997）

では，移動行為を言語化する場合に，日本語は状況を把握する認知レベルにおいて，表現者つまり話者の関心はまず何に向けられるのであろうか。本稿では，日本語は，移動行為の言語化に先立つ状況把握の際に，まず何よりも問題の移動が話者または話者が視点を置く場所に向かう移動なのかどうかを把握することを話者に要求する言語であると考える。

(12) でも見たように，マデ格を用いた移動範囲を問題にしている文であっても，移動範囲の終着点が発話場所であるならば「様態」の動詞だけでは文は不自然となる。この場合，必ず「話者の方に向かう移動」であることを示す「来る」を用いなくてはならない。しかし，「話者の方に向かう移動」ではない場合には，「様態」の動詞に「行く」を付け加えるか否かは自由である。(cf. (11)) このことは，まさに，日本語では，移動過程を問題としているのか否かということよりも，問題の移動行為が話者にとって接近として認知される移動であるのか否かという点を第一に判断しなければならないことを示している。

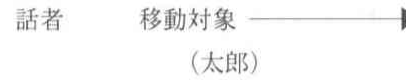
また，このことは，情報としては無標の焦点[注3]を持つ眼前の移動行為を言語化する場合にも同じく観察される。図２・図３のように移動対象が話者以外の「方向」へ向かって移動しているような状況では，「行く」を用いた文 (13) の発話も用いない文 (14) の発

話も可能である。つまり，話者から離反する移動であるとか，話者にとってこの移動は接近や離反といった意味を持たない中立的な移動であるということを必ずしも発話の中で示す必要はない。

（図２）



（図３）



(13) あっ，太郎が歩いて行く。
(14) あっ，太郎が歩いている。

ところが，図４のように移動対象が話者に向かって移動してくるような状況を話者が言語化する場合には，通常（15）（16）のような「来る」を含んだ文が発話されなければならない。「来る」を用いて問題の移動が話者に向かっての移動（接近）であることを必ず文の命題内容の中に含めなければ，図４の状況を描写する文としては適切ではない。[注４]

（図４）



（15）あっ，太郎が来る／来た。
（16）あっ，太郎が歩いて来る。

このように，日本語は移動行為の状況把握の際に「話者への接近移動」であるのか否かをまず第一に把握するという認知上の特性を持つ言語であるとすれば，「方向」の移動動詞の中でも特に「来る」と「行く」が日本語で頻繁かつ非常に容易に他の移動動詞と共に用いられるという事実も納得できる。(ex. 登ってくる，登っていく，上がってくる，上がっていく，降りてくる，降りていく，下ってくる，下っていく，渡ってくる，渡っていく，etc.)

以上のことより，日本語は，移動を表現する場合に，その状況を把握する認知レベルにおいて問題の移動が「話者に向かう移動（接近）」であるのか否かの識別を要求する認知構造を持つ言語であるといえる。問題の移動行為が「接近」と認知されるならば，「来る」の使用は義務的であり，『「接近」ではない』つまり話者にとっては離反または中立の移動であると認知されるならば，他の何らかの移動動詞が用いられている限り「行く」の使用は任意である。その点で，日本語は，宮島1975が指摘した語彙的に方向の区別に富む言語で

あるという以外に，移動行為の表現において認知的に「方向」を重視する言語であるといえる。

2－3．「時間的方向」・「事態の推移の方向」と「いく」「くる」

2－2節で，日本語は問題の移動行為の「移動の方向」を認知的に重視する言語であると述べた。移動行為の「移動の方向」とは，話者の視点がどこにおかれているのかという話者の主観が関係するものではあるが，本質的には話者が視点をおく場所と移動者または移動物との間の物理的・空間的関係のことである。したがって，これは物理的・空間的方向と呼べる。しかしながら，実際の「いく」「くる」の使用を見てみると，日本語は物理的・空間的な方向の認知だけに特別敏感で厳しい言語であるわけではないようである。

(17a) 私は何が起こってもその日までずっと我慢した。
(17b) 私は何が起こってもその日までずっと我慢してきた／我慢していった。
(18a) 芳子はずっとそのことを考えていた。
(18b) 芳子はずっとそのことを考えてきた／考えていった。
(19) いつもこの鍵でドアを開けてきた／開けていった。
(20) 時々ペンキで塗り直してきた／塗り直していったが，もう全面改修するしかなかった。
(21a) 買いこんであった食料がどんどんなくなった。
(21b) 買いこんであった食料がどんどんなくなってきた／なくなっていった。
(22a) 当初考えていた通りの姿になった。
(22b) 当初考えていた通りの姿になってきた／なっていった。

(17) ～ (22) の「いく」「くる」は，前節までに見てきた物理的・空間的な方向を示しているわけではない。これらの文の「くる」を用いたものは，確かに今までの議論の中で述べたように，ある意味では話者が視点をおいた場所への接近を示しているとはいえるが，その場所は物理的・空間的場所ではない。この場合，話者が視点をおいている場所というのは，時間軸上のある点であったり，出来事や事態の推移していく過程のある局面であって，(17b) (18b) (19) (20) (21b) (22b) の文はそこから出来事・事態を眺めている表現であると言える。つまり，これらの例の「いく」「くる」は，「時間的方向」や「事態の推移の方向」と話者との間の関係が接近であるのか離反または中立であるのかを示しているのである(注5)。

2－4．日本語の認知レベルの特性

今まで見てきたことより，日本語では特に「方向」に関心が向けられるのは移動行為の状況把握だけではない，言い換えれば，状況把握の際に物理的・空間的方向にだけ関心が向けられるわけではない，ということが日本語の認知レベルでの特徴として浮かび上がってくる。つまり，日本語は，何らかの行為・出来事を言語化する際には，それが物理的移動であろうとなかろうと，行為・出来事の「方向」と話者の視点との位置関係の把握に敏感な言語であるといえる。

しかしながら，ここで注意しておかなくてはならないことが2つある。一つは，日本語は物理的移動の状況把握の場合は，その移動の方向（話者の視点への接近移動であるのか否か）の認知が不可欠であり，その認知内容が「来る」の使用または未使用によって義務的に明示されなければならないが，それ以外の状況把握の場合には，方向の明示は義務的ではないということである。(cf.（17ａ）（18ａ）（21ａ）（22ａ)) もう一つは，時間的方向や事態の推移の方向を表す「いく」「くる」を含む「～ていく」「～てくる」の使用は，実は「方向」という意味概念よりもアスペクトの意味範疇に近づいているということである。実際，「～ていく」「～てくる」は継続相，習慣相や多回相を意味する形式となっている。したがって，「～ていく」や「～てくる」の視点の場所は，話者の共感度によって決定されるというよりも文脈上または情報上の要因で決定されるため，「～した」，「～ている」などの他のアスペクト形式との比較の上でさらに考えなければならないものである。この分析については，本稿では扱わず稿を改めることとする。

3．認知特性の研究の必要性

前節では，日本語の移動動詞の実際の使用を説明するためには，日本語は問題の移動が「話者にとって接近なのか否か」という「方向」に敏感な認知構造を持つ言語であるという点を考える必要があると指摘した。今までの研究でこの認知特性の分析の必要性が取り沙汰されてこなかったのは，一貫して『世界には「行く」「来る」のない言語も存在するが，日本語は「行く」「来る」をもつ言語である』という認識の上で他言語との比較研究がおこなわれてきたからだと思われる。

例えば，「行く」「来る」の区別を持つ言語としての日本語に対して，ロシア語は「行く」「来る」の区別がない言語であるとよく言われるが，それは次のような例が存在するためであると思われる。

(23 a) Vot, Sergej neset ko mne
ほら セルゲイ nom 歩いて運ぶ (nesti) imperf-det-pres-3sg 私のところへ
čajnik.
ポット m-sg-acc
ほら，セルゲイが私のところへポットを運んで来るよ。

(23 b) Vot, Sergej neset k nej čajnik.
彼女のところへ
ほら，セルゲイが彼女のところへポットを運んで行くよ。

(24 a) Kogda ja vezla ėti veščі
～の時 私 nom 乗り物で運ぶ (vesti) imperf-det-past-f これらの荷物 pl-acc
sjuda, ja posmotrela avapiju.
ここへ 私 nom 見る perf-past-f 事故 f-sg-acc
私はこの荷物をここへ運んで来る時に事故を目撃しました。

(24 b) Kogda ja vezla ėti veščі k nemu, ja posmotrela avapiju.
彼のところへ
私はこの荷物を彼のところへ運んで行く時に，事故を目撃しました。

(25 a) Idti sjuda bylo očen' tjaželo.
歩く (idti) imperf-det-inf ここへ ～だ imperf-past-n とても 大変な n-sg
ここへ歩いて来るのは大変だった。

(25 b) Idti tuda bylo očen' tjaželo.
そこへ
そこへ歩いて行くのは大変だった。

(26 a) Ehat' na avtobuse sjuda bylo očen'
(乗り物で) 行く・来る (ehat') imperf-det-inf バスで ここへ
tjaželo.
ここへバスで来るのは大変だった。

(26 b) Ehat' na avtobuse tuda bylo očen' tjaželo.
そこへ
そこへバスで行くのは大変だった。

確かに (23) ～ (26) のロシア語の例文では，移動方法によって用いられる動詞は異なっているが，「話者に向かう移動 (接近) であるのか否か」という点は関係なく同一の動詞が用いられている。したがって，ロシア語の「(歩いて) 運ぶ "nesti"」「(乗り物で) 運ぶ

“vezti”」「(歩いて) 行く・来る “idti”」「(乗り物で) 行く・来る “ehat'”」はそれぞれ日本語では方向に応じて「行く」または「来る」を使って訳し分けられている。

これらの例だけを見れば，日本語とロシア語の移動動詞の違いは『日本語は「行く」「来る」の区別のある言語であり，ロシア語は「行く」「来る」の区別のない言語である』という記述で十分であると考えられるかもしれない。しかしながら，(23) ～ (26) の日本語訳に見られるような「行く」「来る」の違いがないからといって，日本語の「行く」「来る」がロシア語で常に一つの動詞に対応しているわけではない。

(27)　Zavtra　ja　poedu　k　nemu.
　　明日　私 nom　(乗り物で) 行く (poehat') perf-pres-1sg　彼のところへ
　　明日，私は彼のところへ行きます。

(28 a)　Zavtra　on　priedet　ko　mne.
　　彼 nom　(乗り物で) 来る (priehat') perf-pres-3sg　私のところへ
　　明日，彼は私のところへ来ます。

(28 b) ＊Zavtra　on　poedet　ko　mne.
　　彼 nom　(乗り物で) 行く (poehat') perf-pres- 3 sg　私のところへ

(29 a)　Zavtra　vy　priedete　ko　mne.
　　あなた nom　(乗り物で) 来る (priehat') perf-pres- 2 pl　私のところへ
　　明日，あなたは私のところへ来るんですね。

(29 b) ＊Zavtra　vy　poedete　ko　mne.
　　あなた nom　(乗り物で) 行く (poehat') perf-pres-2pl　私のところへ

(30 a)　Zavtra　ja　priedu　k　vam.
　　私 nom　(乗り物で) 来る (priehat') perf-pres-1sg　あなたのところへ
　　明日，私はあなたのところへ行きます。

(30 b) ＊Zavtra　ja　poedu　k　vam.
　　私 nom　(乗り物で) 行く (poehat') perf-pres-1sg　あなたのところへ

(31 a)　Včera　ona　hodila　k　nemu.
　　昨日　彼女 nom　(歩いて) 行く (hodit') imperf-indet-past-f-sg　彼のところへ
　　昨日，彼女は彼のところへ行きました (よ)。(私は彼のところに行かなかった。)

(31 b)　Včera　ona　prihodila　k　nemu.
　　彼女 nom　(歩いて) 来る (prihodit') imperf-past-f-sg　彼のところへ
　　昨日，彼女は彼のところに来ましたよ。(彼女が来た時，私も彼のところにいた。)

(32 a) Včera ja hodil k nemu.
私 nom 歩く (hodit') imperf-indet-past-m-sg 彼のところへ
昨日，私は彼のところに（一度／何度も）行きました。

(32 b) Včera on hodil ko mne.
彼 nom 歩く (hodit') imperf-indet-past-m-sg 私のところへ
昨日，彼は私のところに何度も来ました。

(32 c) Včera on prihodil ko mne.
彼 nom (歩いて) 来る (prihodit') imperf-past-m-sg 私のところへ
昨日，彼は私のところに（一度／何度も）来ました。

ロシア語の動詞はアスペクト的意味特性を個々の動詞の語義の中に含んでいる。つまり，全てのロシア語の動詞は，完了体動詞 "perfective verb" か不完了体動詞 "imperfective verb" のいずれかに属しているということであり，移動行為または移動が関係する出来事を表す動詞についても，完了体動詞と不完了体動詞がロシア語には存在している。しかしながら，ロシア語の運動・移動を表す不完了体動詞の中には，そのアスペクト的意味以外に，「方向」の概念によってさらに二つの動詞（定動詞 "determinete verb" と不定動詞 "indeterminate verb"）に分けられる一群の動詞のグループが存在している。この両者は，定動詞の本質的に表す移動が「一方向に向かう移動」であるのに対して，不定動詞は本質的には「方向不定の移動」または「ニ方向の移動」を表すという点で異なっている。(清水1995, pp.174～200) したがって，ロシア語の移動表現に関わる動詞には，定動詞（不完了体動詞），不定動詞（不完了体動詞），定—不定の対立とは無関係な不完了体動詞，完了体動詞という全部で四つの動詞が存在していることになる。そして，(27) ～ (32) の例文を参照してもわかるように，日本語の「行く」「来る」に対してロシア語で一つの同じ動詞が用いられるわけではなく，その使い分けは日本語とは異なる要因で決まっている。[注6] (27) ～ (30) の例文を見てみると，(27) (28 a) (29 a) と (28 b) (29 b) の違いはむしろ日本語と同じであるように思われるが，(30 a) と (30 b) を参照すると日本語の「行く」「来る」とロシア語の "poehat'" と "priehat'" は対応しているわけではないことが分かる。また，(31 a) と (31 b) では，「様態」の意味を含むか否かという点を除いては，日本語の「行く」「来る」とロシア語の "hodit'", "prihodit'" が対応しているように思われるが，(32) によってそれは錯覚であるということがわかる。そして，逆に (27) ～ (32) の例から，ロシア語では四つの動詞が何らかの要因の基に使い分けられているのに対して，日本語では一貫して「行く」「来る」だけで状況が区別されるということが日本語の移動表現の特徴として浮かび上がってくる。

つまり，日本語とロシア語の移動表現を比較しようとする場合，『日本語は「いく」「くる」の区別がある言語であり，ロシア語はない言語である』といった指摘はあまり意味を持たないのである。ロシア語の移動表現に関する詳しい分析は稿を改めるが，ロシア語でも動詞選択に関してはやはり「話者の視点」が関係していると思われる。ただし，それは，日本語における『どの地点から出来事を眺めるのか』という「視点」の機能とは異なり，言語化に先立つ状況把握の際に『出来事のどの局面を話者が取りあげるのか』ということがロシア語の動詞選択の決定要因であると考えられる。言い換えれば，日本語とロシア語は，状況の把握の仕方，つまり，認知構造の点で異なる言語なのである。

英語を考えてみても，“go”と“come”，“take”と“bring”の違いは，全く同じというわけではないにしろ，かなり日本語の「行く」「来る」の違いと一致すると考えられるが，日本語のように時間的移動や事態の推移といったものまで『話者に対する接近か否か』という観点から状況把握しているわけではない。そのような状況把握の際には，「方向」というよりもアスペクトに話者の関心がおかれ，完了進行形などの動詞形に反映される。つまり，英語は，状況把握の際に「話者への接近か否か」ということを認知しなければならないのは，移動を表す動詞の中でも“go”や“come”，“take”や“bring”といったごく限られた場合のみであり，日本語の認知特性とは異なっている。

以上の分析に続けて，「意味的に異なる動詞が存在するため，認知の仕方が違う」のか，または「認知の仕方が違うから，語彙的に異なる語が存在する」のかということを議論するつもりはない。これは「卵が先か，ニワトリが先か」という議論と同じであるからである。しかしながら，人間にとって普遍的な現象である移動表現を通言語的に比較研究するためには，それぞれの言語の動詞の意味的記述だけでは不充分であり，各言語の認知構造の特性を考えなければならないと言える。

4．結語

本稿の考察では，各言語の移動表現の実際の使用に関する研究のためには，動詞の語彙的意味だけでなく，その言語の状況把握の際の認知レベルの特性を考慮に入れなければならないということを主張した。考察の結果，日本語は，言語化に先立つ状況把握の際に「物理的・空間的」であるにせよ「時間的」または「事態の推移」という観点からにせよ，問題の移動または出来事が「話者への接近であるか否か」を常に第一に識別する認知特性を持つ言語であることを指摘した。しかしながら世界の言語の中には，例えばロシア語のように，日本語とは異なる認知特性を持ち，移動を表現する際にはその日本語とは異なる認知特性によって実際の動詞の使用が決定される言語も存在する。したがって，通言語的

な移動表現の研究のためには，動詞の意味記述だけでなく各言語が持つ認知特性の研究が必要であり，その認知特性によって各言語で語彙として存在する移動現象に関係する動詞の使用が決定されているということを述べた。

略字

nom：主格	acc：対格	1：一人称	2：二人称	3：三人称
sg：単数	pl：複数	m：男性	n：中性	f：女性
perf：完了体動詞	imperf：不完了体動詞		det：定動詞	
indet：不定動詞	pres：現在形	past：過去形	inf：不定形	

注）

（注１）本稿では「様態」という用語を採用したが，宮島1984では「移動法」という用語を用いている。

（注２）疑問文･命令文でなぜ聞き手の視点に話者が乗り移ることが可能なのかについては大江1975（pp.85～91）を参照。

（注３）福地1985によれば，談話には文法構造とは独立した情報構造が存在していると述べ，談話はいくつかの情報の単位から成り，情報的に最も価値の高い情報の単位部分を情報の焦点と呼ぶとするHallidayの説を紹介している。この情報の焦点は他の部分と異なる音調を持っており，情報の焦点である部分が情報構造の点から見た新情報の核となっている。そして情報構造には，有標の情報構造と無標の情報構造とが存在し，特殊な文脈を必要とするものは有標の情報構造であると述べている。（pp.31～42）

（注４）図４のような状況が話者の目の前で起こっている場合に（14）の文の発話が自然または適切となるのは，眼前の移動行為を把握する以前にすでに「太郎は足をけがしているかなにかで現在は歩けないはずである」というコンテキスト（または，言い換えれば話者にすでに認識された状況）がなければならない。つまり，有標の情報構造を持っていなければならないのである。したがって，このような例は，本節の移動行為の認知上の特徴を考察するための考察対象となる状況からは外れる状況であるので，現在の議論では図４の状況を描写する文としては適切ではないと考える。

（注５）「時間的方向」や「事態の推移の方向」を表す「いく」「くる」は，漢字を使って「なくなって行く」「なくなって来る」とは通常書かない点で，「物理的・空間的方向」を表す「行く」「来る」とは区別されるが，両者は同じ語源のものであるので，方向を表すという点では同じものとして扱っても問題ないと考える。

（注６）ロシア語では，運動・移動を表す動詞の選択を支配する要因は，行為や出来事のどの局面に視点をおくことがコンテキストや情報上適切であるかという語用論上の要因が状況把握の際に関係しているようである。詳しい分析に関しては稿を改める。

参考文献

福地　肇．1985.『談話の構造』（新英文法選書10），大修館．

Ikegami，yoshihiko.1970. *The semiological structure of the English verbs of motion*. Tokyo：Sanseido.

Judina，L.P.，Bitehtina，G.A..1976. *Ustnye trenirovočnye upražnenija po teme 'glagoly dviženija'*，Moskva：Izdatel'stvo moskovskogo univ..

Judina，L.P..1985.*Idti ili hodit'? － glagoly dviženija v covremennom russkom jazyke*，Moskva：Izdatel'stvo moskovskogo univ..

池上喜彦．1981.『'する'と'なる'の言語学』，大修館．

1983.「テクストとテクストの構造」，『談話の研究と教育Ⅰ』国立国語研究所，7―42.

景山太郎．1996.『動詞意味論―言語と認知の接点』（日英語対照研究シリーズ5），くろしお出版．

久野　暲．1978.『談話の文法』，大修館

Langacker，Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar II*. Stanford：Stanford univ..

松本　曜．1997.「英語前置詞による'到達経路表現'－認知言語学的視点から」，『英語青年』142:12，13－15.

宮島達夫．1984.「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」，『金田一春彦博士古希記念論文集』，三省堂．

大江三郎．1975.『日英語の比較研究―主観性をめぐって』，南雲堂．

Rassudova，O.P..1982. *Upotreblenie vidov glagola v sovremennom pusskom jazyke*，Moskva：Russkij jazyk.

清水伸子．1995.「ロシア語の'運動の動詞'について」，『名古屋大学言語学論集』11，159－224.

Talmy，Leonald. 1985. Lexicalization patterns：Semantic structure in lexical forms. In *Language typology and syntactic description III，Grammatical categories and the lexcon*，ed. Tim Shopen，57 － 149. Cambridge：Cambridge univ.

田中茂範・松本曜．1997.『空間と移動の表現』，研究社．

山梨正明．1995.『認知文法論』，ひつじ書房．